
いつだったのか、忘れるくらい君が好きで。

サークルO.L.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつだつたのか、忘れるくらい君が好きで。

【著者名】

サークル〇・」・

N6256Z

【あらすじ】

タイトルが本編で、内容は詩である。

君を好きになつたのはいつなのか？（前書き）

タイトルが本題で、お送りするのは尖角です。

君を好きになつたのはいつなのか？

悲しいかな、今日も俺は独りに耐えて生きている。

苦しいかな、友達も彼女もいなただ一人の孤独の生活は。

嬉しいかな、誰にも知らずに死ねるたつた一つの喜びは。

俺は涙を流さない。

涙といつもはとつて昔に枯れてしまつたのだから。

大好きなんて言葉にはとつて飽きてしまつたのだ。

伝えることができない、たつた一人の俺にのしかかる重圧。

そこにあるのは空虚な生活。

悲しみも、怒りも、喜びも、楽しみも、愛も、何も、そこにはない。

俺が君から奪つた幸せは、俺から君といつもの奪つた。

それは、昨日の話だったのか？

それとも、数年前の過去の話なのか？

それとも、俺が生まれるずっと前の話だったのか？

俺はたつた一人の孤独な悪魔。

俺に涙なんてものはいらない。

その涙を映すものは無く、誰も拭ってなどくれないのだから。

自分で拭う」となんてできなによ。

「君を抱きたい」といつために腕を切り落としたから。

君に近づくことなんてできないよ。

その欲望を鎮めるために足を切り落としたのだから。

君の鼓動を知ることはできないよ。

君にしたよ、僕の胸にも穴をあけたのだから。

大好きだったんだ。この世の中で最も。

だけど、俺は罪深き罪人。

君に愛の生き死にを教えることなどできないのだ。

所詮、俺は生けとし死せるもの。

何もそこにはありはしない。

ただ、そこにあるのはたつた一人の虚しき存在。

俺はふと、記憶の奥底を探つてみる。

夢か現か、幻か？

涙の意味は何なのか？

苦しいとは何なのか？

君というものは何なのか？

嬉しさは所々で俺に話しかける。

「君は今、幸せですか？」

「いいや、別に？」俺は答える。

寂しさは俺に話を振りつづける。

「君は一人でもいいのかい？」

「ああ、寂しくはないよ、」

悲しさは俺に言葉を投げかける。

「君は一体、何がしたい？」

「それは、ただただ死にたいだけだ・・・」

君は俺に言つのである。

「あなたは良い人

」

じゃあ、なぜこんなことになるのか？

俺には意味が分からぬ。

愛が愛で無くなつた時、それは一体何になると思つ？

それはゾンビさ、寂しさゆえの一人の人生。

そうだ、俺は無意味に生きるだけ。

だけど、俺の記憶にそれは残っていない。

あたしは、気付いていたのかもしれない。

あなたが、別れを用意するより先に、あたし達の関係が終わりに近づいていたことに。

あなたの傍にいたの、あなたは変わらないの、あたしは変わつてしまつもどかしい。

寂しさがとめどなく溢れ出いで、あたしは過去を振り返つて見る。

こぐらでも戻れるチャンスはあつたはずなのに、あたしはそれに見向きもしないで突き進んだ。

だから、あたし達の関係は終わりを向けるんだ、 、 、 きっと。

ありがとう、 ただそれだけは言わせてよ。

ちよつとだけの恋人関係だつたけど、 楽しかったよ。

じゃあ、一体何があるのだけれどか？

気持ちを静めてあなたの前に立つてみる。
すると、どうなると思つ？

さつきまではトクトク流れていた私の血も、
いつの間にかドックンドックンに変わつてゐるのである。
それはまるで映画の音響みたく大きな音で、
3Dのように私から突き出でせりつで 。

あなたのことが好きなんだ。

Jの血よりも真つ赤な愛が、それを証明しようとしている。

だから、一歩だけでも君の下に近づいてみるよ。

それが、私にとっての精一杯の努力なんだから。

俺はそう思い、君の瞳を見つめてみる。

あなたに会いたい 。

それ以外の気持ちが、必要なのだろうか？

私にはあなたしかいない。

だから、私はあなたを求めるんだ。

あなたが、例え私を好きでなくとも、

私が愛せるのならばそれで構わない。

あなたの意見なんて聞いてないんだよ？

ああ、血だらけの人形たちよ！

私のために、お歌を唄いなさい。

ああ、血だらけのあなたたちよ！

私のために、骨と血肉になるのです。

ああ、素晴らしい子供たちよ！

私のために、死して無くなれ何もかも。

だが、そこに映つてゐるは空っぽになつた俺の姿。

口だけの想いならば、俺はそれなりに言えるであらう。

ただ、愛や恋だけでは語れないのが、君と僕との関係。

でも、俺は思うんだ。

約束を守れない俺、 そして離れ離れになつてしまつた二人の距離。
愛しても、 愛しても、 なかなかその想いは届かない。

ならば、君を愛す理由なんて何もないんだ・・・。

だつたら、俺は何をしても自由だらう。

君を振つたつて、 例え死んだつて、 、 、

逢いたくて、 逢いたくとも、 叶わないならば、 俺はこの愛しさを抱いて眠るよ。

俺は力を失っていたんだ

。

君を知れば知るほど、俺は俺自身を見失っていく。

心は涙に溺れて、俺は記憶に埋もれていく。

叫びはない。そこにあるのは発狂という言葉だけ。

ハレハチおこでよ、キモチヨクナレルカラ。

ハレハチおいでよ、ダキシメテアゲルカラ。

君からそんな言葉が聞こえてくるようで、君の口元の動きを俺は直
視できない。

ハレハチによ、クッテアゲヨウカ？

ハレハチにいよ、ヤイテシマオウカ？

俺はお返しに、その言葉を君に捧げる

。

かつ思つた時には、すでに手遅れだった。

生と死の狭間、

過去と現在の記憶、

無意味と混沌の悲しみ、

俺は君を絶対に許さない。

例え、人生が歪んだとしたって、

例え、性格が捻じ曲がっていると言われたって、

俺は絶対に君を赦しはしない。

死ねばいいのに。

俺は、その言葉を君に捧ぐよ。

愛していた？

この俺様が？

君みたいな女を？

ビッチなんだよ？君は。

ヤレれば誰だって構わない君だよ？

俺が好きになる訳がないだろ？

屈辱だよ。

例え、君を一瞬でも離したといつ事実があるのよ。
最悪だよ。

君に指輪をあげてしまったことが

。

君が好きだつたけれど、想いすぎていた。

人生で少しだけ後悔したことがある。

それは君に別れを告げてしまったこと。

大好きだつたけれど、なんだか気持ちはずれ違つて、うまくいかない。

そんな日の繰り返しに俺は疲れてしまったから、君に別れを告げた。
それからも、時々君のことを考えていた。

あの時・・・この時・・・そして今・・・

何をしてやればよかつたのか？

それでも俺達の関係はダメだつたのか？

苦しかつた日々は免れたのか？乗り越えることができたのか？

俺は君と別れたことで何か手に入れることができたのか？

多分、手に入れたのは“後悔”　　それだけだらう。

何事も、 “やつすめ” がよくな。

全てのことはうまくはない。

そんなことはわかつていたよ。

だけど、君とのことの全部がダメだなんて思つてなんかいなかつた。

俺は、考えたこともなかつた。

君と出会つて、喧嘩をして、それでいて苦しくつて、ふと気が付け
ば別れていて・・・

そして、君は死んでしまつた、いなくなつてしまつた・・・俺の前
から・・・

何だ、人生つてそんなものなのかな?

命つてそんなに簡単に失われるものなのかな?

俺はわからないから、少しだけ神様に刃向つてみるよ。

それは、誰もが知っている“あたり前の事”。

歌を唄い、言葉を葬る。

そこにあるのは、人間の叫び。

我らは行つ、悪魔の降臨儀式。

「」は正も誤も存在しない、偽りの世界。

本当なんでものせ、「」にはありはしない。

君も俺も、そして全てが嘘偽りでできている。

さあ、血に染まるがいい。 ど「」までも真紅に。

真つ赤に飢えた獸どもが、お前の血を求めて蠢いているぞ？

さあ、啜れ。 好きなだけ生き血を啜るがいい。

真つ赤に飢えた獸どもが、お前の魂を求めて扉を叩く。

だけど、俺はそんな当たり前に気付きもせず、俺はお前を愛し続けた。

俺はお前が憎い。

楽しかった人生を、つまらない人生に変えたお前が憎い。

お前に出逢うまでは、「あの子がかわいい」とか「あの子ヒヤツ
たい」とか思えたのに、今はお前しか考えることができない。

憎くて、だけど愛してるから、、、

お前を憎むことはできても、殺すことはできない。

せめて、出逢った人がお前じやなかつたのなら、俺は変われたの
かな？

俺は違った人生を歩めていたのかな？

ありがとな、お前を憎んでいても、俺は幸せだったよ。

ありがとな、死んでも、お前だけは忘れないからな・・・

何もかもが手遅れ、何もかもが叶わない。

頭が飛ぶぐらいイカレた感じで、頭が飛ぶぐらいキモチヨク、

頭がとろける位の熱いキスで、頭の中が君だけ。

砕け散る心の音は虚しくて、切なくて、

俺はそんな想いを君に向けて放つっていたんだ

。

だけど、想いは届かない。

閉ざされた扉をどれだけ叩いたところで、

中にはいる人は叩かれていることにすら気付かない。

そのことを知らない君は、俺に向かってどれだけひどい言葉を浴びさせただろうか？

多分、そんなことにすら気付いていない君は、

これから先も俺を傷つけ続けるのだろう

？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6256z/>

いつだったのか、忘れるくらい君が好きで。

2011年12月27日19時53分発行